

「ラストチャンス」

井本智恵子

登場人物

夏見聡子 (43) 会社員
佐藤涼介 (43) 聡子の元カレ

橋本あみ (40) 聡子の友人
石田梨奈 (41) 聡子の友人

夏見加代 (70) 聡子の母親
夏見進之助 (72) 聡子の父親

佐藤桃 (13) 涼介の娘
佐藤百合 (40) 涼介の元妻

橋本雄太 (45) あみの夫
石田翔 (14) 梨奈の息子

女医

○新宿不動産

机でパソコンを打つ夏見聡子（43）。
聡子N「40をすぎた頃から薄々思い始めていた」

○電車の中（夜）

スマホを見ている聡子。

○スーパー（夜）

夕食の買い物をする聡子。
エコバックを持参している。
周囲には夫婦らしきカップルが楽しそうに買い物をしている。
聡子N「結婚や出産は諦めて、このままひとりで気楽にのんびり生きていくんだろうな
って」

聡子、思い出したように薬局に寄る。

○薬局（夜）

薬局から出てくる聡子。

○聡子の家（夜）

高層マンション。

キッチンで料理をしている聡子。

○同・リビング（夜）

自分で作ったパスタを食べる聡子。

聡子「あっ、おいしい」

冷蔵庫からビールを取り出し、グラスに注ごうとする聡子。

と、その時、思い出したように薬局の袋の中に手を入れる聡子。

取り出したのは「妊娠検査薬」だった。しばらく、妊娠検査薬とにらめっこする聡子。

意を決して、トイレに向かう。

× × ×

トイレから聡子の叫び声が聞こえる。

聡子「やば！！！！！！！！」

トイレから妊娠検査薬を持ちながら、
慌てて出てくる聡子。

聡子「マジで、どうしよう。やらかした」

妊娠検査薬には赤い線がくつきり入っ
ている。

あ然として顔の聡子。

聡子のN「独身、彼氏なし、43歳、妊娠し
ました」

○タイトル「ラストチャンス」

○カフェ

T 1ヶ月前

橋本あみ（40）と石田梨奈（41）

と聡子がお茶をしている。

聡子「最近どう？」

あみ「グレてます」

梨奈「うちの息子と同じ。反抗期だ」

あみ「またダメだった。これで6回目、ざっ
と400万使った」

聡子「ひー。高いもんね、不妊治療」

あみ「あーあ。安いBMなら買ったのにな」

梨奈「まだ続けるの？」

あみ「年齢も年齢だからさ、タイムリミット
決めて旦那と相談しなきゃなとか思ってる
けど」

聡子「あみちゃん、私の3つ下だっけ？ ま

だ若いよね。私もう諦めたもん、子ども」

梨奈「やめてよー。大して変わらないのに

『まだ若い』とかいうのさ。もうみんな若
くないから」

あみ「そういう梨奈は？ 最近」

梨奈「私はなんにも変わらず。明治神宮の清
正の井戸のように厳かな感じ」

そんな中、聡子が紙に何かを書いてい
る。

あみ「何書いてるの？」

聡子「諦めることリスト」

梨奈・あみ「諦めることリスト？」

聡子「ねえ、感じない？ 年々諦めることが

増えていってることに」

あみ「確かに」

梨奈「わかる。40すぎてからだよね。それ
って」

聡子「今ならわかる。10代20代30代の
『やりたいことリスト』ってプライスレス
なキラキラした宝石だったんだって」

梨奈「夢と希望がいっぱい」

あみ「40代のやりたいことリストって老後
への貯金？ 健康維持？ 現実しか見えな
い」

聡子「聡子43歳の諦めることリストは、ジ
ヤーン」

【諦めることリスト】

結婚、出産、出世、徹夜、金髪、

ワンナイトセックス

と書かれている。

あみ「だいたいわかるけど、この『ワンナイ
トセックス』って何？」

聡子「最近、ナンパされる？」

あみ「されない」

梨奈「されない」

あみ「あっ、そういうことか」

聡子「要はさ、お酒の勢いに任せてノリでいっつちやえ的なワンナイトセックスですよ。だってもう誰もナンパされないんだよ。知らない間に“ワンナイト”が雲の上の存在になってるって、みんな気づいてる？」

真顔で見つめ合う3人。

一瞬、時間が止まる。

梨奈「ねえ、これ知ってる？」

梨奈、スマホに入ったアプリを見せる。

梨奈「マッチングアプリと出会い系とツイッターを足して3で割ったみたいなの」

聡子「わざわざ割る意味よ」

あみ「梨奈、もしかして再婚活してる？」

梨奈「違う、翔がなんかコソコソやってたから無理やり聞いたの。このアプリのすごいところは、見て、ここ」

ボタンには、「だれでも電話〜どこか

の誰かと電話する」と書かれている。

梨奈「知らない誰かに電話がかかるの。女だ
ったら男に、男だったら女に。ランダムに」

聡子「え？ 知らない人と話す意味は？」

梨奈「意味なんかないんじゃないの？ 暇だ
から暇な人と話すみたいよ、今の若者は」

あみ「いわゆる暇電ってやつ？」

梨奈「聡子、もうナンパされないって嘆いて
いたから、これはどう？」

聡子「は？ やだ。やるわけないじゃん」

○聡子の家（夜）冒頭に戻る

あ然とした顔の聡子。

携帯で電話をかける。

聡子「もしもし？ 梨奈？ 今大丈夫？」

梨奈「大丈夫だよー」

聡子「ねえ、やらかした」

梨奈「え？ 何をやらかしたの？」

聡子「妊娠しちゃった」

梨奈「え？ ええええええええ？ 誰の子？」

聡子「それは」

梨奈「もしかして相手の素性がわからないとか？」

聡子「わかる。わかるけど・・・」

梨奈「誰？」

聡子「涼介」

梨奈「誰だっけそれ？」

聡子「元彼。大学時代から社会人3年目くらいまで付き合ってた」

梨奈「よかった。てつきり『だれでも電話』の男かと思った」

聡子「だれでもよくないし、電話しないし」

梨奈「病院は行った？」

聡子「行ってない。検査薬だけ」

梨奈「検査薬は百パじゃないから、まずは病院に行ったら？ 話はそれから」

聡子「そうだね・・・」

電話を切り、ため息をつく聡子。

妊娠検査薬を見ている聡子はとても悲しそうな顔をしている。

○産婦人科病院

聡子と先生が対面している。

女医「妊娠してますね。おめでとうございませう。妊娠7週です」

聡子「・・・」

女医、エコー写真を指差して、

女医「この黒い丸が胎囊です。これが徐々に大きくなっていきます。心拍確認はまだないので、また1、2週間後に来てください。

何か質問はありますか？」

聡子「あの・・・堕ろすとしたら何週まででしたっけ？」

女医「あっそう。そういうことだったら妊娠21週中までですね」

聡子「わかりました。ありがとうございます」
女医「その場合、お相手の同意書が必要なので忘れずにお持ちください」

聡子「・・・はい・・・」

聡子、同意書の書類をバッグに入れる。

○路上

ぼーっとしながら歩く聡子。

前から歩いてくる人と肩がぶつかる。

聡子、慌ててお腹をかばう。

○聡子の家

ソファーに座りため息をつく聡子。

目の前にはエコー写真が置かれている。

聡子N「結婚も出産も諦めたばかりなのに、

なんで？　なんで今なの？」

そこにチャイムが鳴り、部屋に入って

来たのは梨奈。

梨奈「本当だったんだ？」

聡子「こんな嘘つかないでしょ」

梨奈「ねえ、あみちゃんは？」

聡子「まだ言っていない」

梨奈「なんで？」

聡子「言えないでしょ。妊活で悩んでる人に

妊娠しました。相手は元彼です。なんて」

と、そこに聡子のライン着信音が鳴る。

聡子がスマホを確認すると、

聡子「噂をすれば、あみから。『今近くに
いるんだけど』だって」

梨奈「は？ 毎度のことながらタイミングが
スピリチュアル」

聡子「『ちようど今、梨奈きてる。おいで』
でいい？」

梨奈「うん。で、その涼介って人には言った
の？」

聡子「言ってない。言えないよ」

梨奈「そもそも聡子と涼介って付き合ってる
の？」

聡子「付き合っていない」

梨奈「ってことは・・・どんな関係？」

聡子「大学時代から7年付き合った元彼。

向こうが離婚した3年前に再会して、こっ
ちも彼氏なんていないし、結婚諦めたし。

で、ほら、ね？」

梨奈「全然知らなかった」

聡子「おじさんとおばさんがセックスしている話なんて聞きたい？ 私ならお金もらっても無理」

と、部屋のチャイムが鳴り、あみがやってくる。

聡子、とっさにエコー写真を隠す。

あみ「お疲れ様〜。梨奈ちゃん来てたの？

これお土産」

あみ、テーブルにビール缶を並べる。

梨奈「う、うん。今来たばかり」

聡子「今、グラス持ってくるね」

聡子、2個のグラスにビールを注ぐ。

自分の分はコーヒーにする。

あみ「え？ どしたの？ 飲まないの？」

聡子「う、うん。ちよつと具合がね」

あみ「大丈夫？」

聡子「逆にあみは飲んでいいの？」

あみ「今、グレてる期間だからいいの」

梨奈「聡子、その・・・カフェインもあんまり取りすぎるとよくないかも」

聡子「あ、そうか。そうだね」

あみ「カフェイン？ ん？ 2人ともなんか
様子がおかしいんだけど」

聡子「え、そうかな？」

あみ「なんかあったでしょ？ 彼氏できた？」

聡子「彼氏の前に、子供ができました」

あみ「子供？ 妊娠してるの？」

聡子「はい」

あみ「そう・・・そうなんだ。で、誰の子？」

複雑な表情をするあみ。

× × ×

聡子「・・・ということなんですけど」

あみ「で、聡子、どうするの？」

聡子「それが迷ってて、こんなことになるな
んて思ってなかったからパニックで」

梨奈「まず相手に言わないと何も始まらない

よ？」

聡子「だけど、彼は私には恋愛感情はないし、
気心しれたただの友達みたいな。まあ元彼

か。それに前の奥さんとの間に子供がいるし、私も43歳で結婚も出産も諦めてそれなりに楽しく生きて行こうと思ってて。だからこのまま彼には内緒にして、墮ろそうかなとも考えていて・・・」

あみ「聡子、43歳の女性が妊娠出産する確率って何パーセントかわかる？」

聡子「10パーセントとか？」

あみ「バカバカ、約3パーセントだよ？」

聡子「3パーセント？」

あみ「なに迷ってるの？ 聡子、これがラス

トチャンスだよ？ 奇跡が起きたんだよ！

あとで後悔しても、もう一生チャンスは来

ないんだよ？」

聡子「ラストチャンス・・・」

あみ「男がダメって言っても、未婚シングル

でも、何が何でも産んだほうがいい」

聡子「・・・」

梨奈「ごめん。ちよつといい？ 私はそうは思わない。未婚シングルでもいいとかさ、

軽々しく言ってほしくない」

あみ「え？」

梨奈「私はバツイチシングルマザーだけど、育児って本当に大変だよ。子供が小さい頃は何時間も夜泣きして、ひとりで途方に暮れてこっちも大泣きしたり。反抗期がきたら大変で、もう私無人島に逃げようかなって思ったこと何回もある」

あみ「全然知らなかった。そんな時は、うちら頼ってくれたらよかったのに」

梨奈「言えないよ。自分たちの都合で勝手に離婚してシングルになったのに、助けてって言ったら負けになる。自分の選択が間違ってたって証明することになっちゃう」

聡子「・・・」

梨奈「パパなしで、ひとりだけの力で子供の衣食住を揃えるってほんと大変だよ。私は今でも自分が『カイジ』の鉄骨渡りをしている夢をいつも見る。一步でも足を踏み外したら、翔と一緒に真っ逆さまに落ちてい

く。だから簡単に未婚シングルでもいいな
んて言ってほしくない」

あみ「・・・ごめん」

聡子「梨奈、いつも明るいから、そんなプレ
ッシャー抱えてたって知らなかった。気づ
いてあげられなくて、ごめんね」

梨奈「熱くなってごめん。ただ本当によく考
えてほしくて」

聡子「うん。ありがとう」

3人の間に、重い空気が流れる。

あみ「じゃ、私帰るね」

梨奈「私もお暇しようかな」

聡子「なんか、ごめんね。私がしようもない
セックスしたばかりに」

苦笑いするあみと梨奈。

× × ×

あみと梨奈が帰った後、聡子は棚から

【諦めることリスト】を取り出し、
「出産」に赤ペンで丸をする。

聡子N「いきなり敗者復活戦のように人生に殴り込みをかけてきた出産。産むのか産まないのか？ ラストチャンスの行方は、私にもわからなかった」

○あみの家（夜）

あみの夫・橋本雄太（45）が茶碗洗いをしているところに、あみが帰ってくる。

あみ「ただいま」

橋本「おかえり。あれ？ 早かったね」

あみ「何食べたの？」

橋本「パスタ」

あみ「まだある？ お腹減った」

橋本「聡子ちゃんのところで、食べてきたんじゃないの？」

あみ「・・・聡子、妊娠したんだって」

橋本「え？」

あみ「元彼の子」

橋本「不倫？」

あみ「バツイチだって」

橋本「そう」

あみ、冷蔵庫からビールを取り出して
飲み始める。

あみ「どうして来て欲しい人のところには来
なくて、来なくていい人のところに来るの
かな」

橋本「・・・」

部屋にはさまざまな神社のお札やお守
りが並べられ、水晶などスピリチュア
ルグッズも置かれている。

あみ「こんなに頑張ってるのに。なんで？
どうして？ どうして私のところには来て
くれないの？」

あみの目から涙が溢れる。

橋本「子供がいなくても2人で楽しく生きて
いけばいいよ」

あみ「子供のいない人生って楽しいのかな？」
橋本「僕はあみがいれば楽しい。あみは僕が
いるだけじゃ楽しくない？」

あみ「（会話を遮るように）聡子、産むか迷
ってるって。梨奈もシングルでの育児は大
変だからよく考えたほうがいいって」

橋本「うん」

あみ「妊娠をまるで罰ゲームがきたみたいなの
リアクションしてて。だったらその赤ちゃん、
私にちようだいよって思った。ねえ、
ちようだいよ」

あみ、泣き崩れる。

あみを抱きしめる橋本。

橋本「パスタでも食べようか？」

泣きながらミートソースを食べるあみ。

○梨奈の家（夜）

梨奈の息子・石田翔（14）がゲーム
をしているところに、梨奈が帰って
くる。

梨奈「ただいまー」

翔「・・・」

梨奈「た・だ・い・ま」

翔「・・・おう」

翔に用意してあった夕食を食べたのを
確認している梨奈。

梨奈「聡子ちゃんがさー、妊娠した」

翔「で？」

梨奈「未婚シングルになるかもって」

翔「で？」

梨奈「翔は、生まれてきてよかった？」

翔「は？」

梨奈「生まれてきてよかったと思う？」

翔「全然よくねーよ」

梨奈「え？ どうして？」

翔「しつけえな。酒飲んできたろ？ ウザ絡
みすんなよ」

梨奈「そんな怒んなくてもいいじゃん」

翔「怒ってねーし。うざいんだよ。そっちが
『あんたなんか生まなきやよかった』って
言ってただろ？」

梨奈「・・・それは大昔の話でしょ？」

翔「うるせ、毒親」

翔、自分の部屋に入っていく。

梨奈、悲しそうな顔をする。

○聡子の家（夜）

聡子、ソファ―に座ってスマホをいじっている。目の前にはエコー写真。

涼介宛てに、文章を書いては消し、書いては消し、意を決したように送信ボタンを押す。

そして、スマホで「妊娠したらすると」「赤ちゃん」「出産」などを検索し、見入ってる。

○聡子の家（夜・日替わり）

玄関チャイムが鳴り、佐藤涼介（43）が入ってくる。

聡子「ごめんね。忙しかった？」

涼介「いや大丈夫だけど、何？ 電話じゃで

きない話って」

聡子「まあ、とりあえず座って」

涼介「ああ」

聡子「最近、仕事忙しい？」

涼介「ぼちぼちかな」

聡子「休みの日ってなにしてるんだっけ？」

涼介「だいたいKindルで漫画読んでる」

聡子「最近面白かったのは？」

涼介「あのーもしかして、今俺、お見合いの練習させられてる？」

聡子「そうそう、そういうこと。子供は何人欲しいですか？　なんて聞いちゃったりして」

涼介「子供ですか？　子供はもういりません。

俺バツイチで現在13歳の娘がおります」

聡子「（複雑な表情で）ですよ。ですよ」

涼介「逆に将来、子供は欲しかったりするんですか？」

聡子「えーっと、そうですね。子供が欲しいというよりも、子供ができました」

涼介「へー。子供が。そうですね」

聡子、自分のお腹を押さえながら、

聡子「子供ができたの」

涼介「え？ 嘘？ 本当に？」

聡子「本当」

涼介「え、それって・・・」

聡子「涼介の子」

涼介、部屋の隅々を見てカメラがないか確認する。

聡子「ドッキリじゃないよ」

聡子、エコー写真を出して見せる。

驚きで固まっている涼介。

しばらく沈黙が続く。

涼介「ごめん・・・俺・・・こんな風になる

と思っただけで・・・」

聡子「・・・わかってる。私もそういうつもりじゃなかったから。もう43だし。ただ、これにサインが必要で・・・」

聡子、中絶同意書とペンを目の前に差し出す。

涼介、躊躇することなく、ゆっくりと同意書にサインする。

涼介「この住所ってマンション名書くの？」

聡子、クスッと笑う。

聡子「あの時と同じこと言ったね。デジャブかと思った」

聡子N「私たちに子供ができたのは2回目だ」

○回想（聡子の家・夜）

T 18年前

ワンルームのマンション。

聡子（25）と涼介（25）の前には
中絶同意書が置かれている。

聡子は泣いている。

聡子「子供ができるのがもうちよっと遅ければよかったのに。・・・なんでこのタイミングなんだろうね？」

涼介「ああ・・・」

聡子「涼介も私も仕事頑張りたいもんね。今産んだら、自分たちのやりたいことできなくなっちゃうもんね。仕方がないよね」

涼介「この住所ってマンション名書くの？」

聡子N「それからすぐに私たちは別れた」

(回想終わり)

○聡子の家(夜)

涼介が中絶同意書にサインを終え、ペンを置く。

顔を見合わせる聡子と涼介。

聡子N「そして、今度はタイミングが遅すぎた。人生には、もっとリズム感を勉強してほしいと思う」

聡子「ありがとう」

涼介「ありがとうではないかな？」

聡子「ありがとう」

涼介「ありがとうトウスでもないかな？」

聡子「呼び出した用事は以上です」

涼介「はよ帰れって？ はいはい」

○同・玄関(夜)

涼介がドアを閉めようとしている。

涼介「じゃ」

聡子「じゃ。気をつけて」

涼介「あっ、金額と振り込みの口座番号、ラインしといて」

聡子「一円単位で折半するから」

涼介「やめとけ。俺が払うから」

笑顔で見送る聡子。

ドアが閉まり、涼介の靴の音が遠ざかっていく。

その場にうずくまって号泣する聡子。

○聡子の家（日替わり）

聡子、インスタグラムでいろいろな赤ちゃんの写真や動画を見ている。すると、どの広告も赤ちゃんグッズの内容に様変わりしていく。

それと同時に、ネットで「高齢出産」「シングルマザー」「未婚シングル」などの単語も調べている。

聡子、キッチン棚の前に並べていたコーヒー豆を奥の方にしまい、代わりに

ルイボステイのバックを前に出す。

○ベビーカー洋品店の前

聡子、立ち止まってベビーカーを見つめている。

○公園

ベビーカーを押す母親や、楽しそうに遊ぶ子供などを目で追う聡子。

あみの声「43歳の女性が妊娠出産する確率って何パーセントかわかる？ 約3パーセントだよ。これがラストチャンスだよ？」

梨奈の声「育児って本当に大変だよ。簡単に未婚シングルでもいいなんて言ってほしくない」

聡子N「すぐに手術日を決めることなんて、できなかつた」

○新宿不動産

机でパソコンを打つのをやめた聡子が、

部長に近づいていく。

聡子「すみません。部長、この日、有給使っていいですか？ ちよつと野暮用がありまして。ありがとうございます」

○焼肉屋（夜）

聡子とあみ、梨奈の3人がいる。

あみ「ビールの人？」

梨奈「はい」

聡子「私、ルイボスティーあつたらルイボスティーで」

梨奈「で、決めたの？」

聡子「うん。・・・墮ろすことにした。今日有給申請して、病院の予約した。部長に野暮用って言った自分に傷ついたよ」

あみ「そっか。まだお酒は解禁ならず？」

聡子「まだここにいらっしやるから。スープーボールくらいのベビーが」

聡子、自分のお腹をさする。

あみ「じゃまだユツケ食べれないね。生肉は

ダメよ」

聡子「そうなの？ 全然知らなかった」

あみ「温泉や銭湯もダメよ」

店に赤ちゃんを連れて家族が入ってくる。ちらっと見て微笑む聡子。

× × ×

肉が運ばれてくる。

あみ「キタキタキター。最後のお肉は、店で一番高いステーキで締めくくる」

梨奈「いいね」

聡子「ん〜。おいしい」

嬉しそうにお肉を食べる3人。

聡子「あみに言われた人生のラストチャンス、活かせなかったな」

あみ「最後なんて言ってごめんね」

聡子「ううん。紛れもなく最後だもん。それにしても、最後って言葉にどうしてこんなにも後ろ髪をひかれるのか」

梨奈「最後の晚餐、最後のキス、最後の雨？」

聡子「ははは。やめてよ、そこで中西保志出
してくるの。世代がわかるから」

あみ「『最後の雨』は若い子も歌ってるよ。

世代を通り越した名曲」

聡子「最後の妊娠・・・か・・・」

その時、赤ちゃんの泣き声が店内に響
き渡る。

墮胎を決めた聡子。

妊活がうまくいかないあみ。

息子との関係が最悪の梨奈。

複雑な表情をする3人。

○路上（夜）

タクシーを止める3人。

聡子「私はちよっと買い物して帰るね。今日

はありがとう。またね！」

あみと梨奈がタクシーに乗り込む。

歩き始める聡子。

○デパート（夜）

コスメ売り場を見て歩く聡子。

女子高生とその母親と思われる二人が化粧品を選んでいる。

聡子N「18年前、あの時産んでいたら今頃高校生か」

そのうち、聡子の足は赤ちゃんグッズのフロアに向かう。

周囲には幸せそうな家族連れ姿。新生児用グッズを手に取る聡子。

○路上（夜）

駅に向かって歩く聡子。

その時、前から涼介と、涼介の娘の佐藤桃（13）、元妻の佐藤百合（40）が歩いてくる。3人は楽しそうな様子だ。

思わず電柱に隠れる聡子。

すれ違いざまに聞こえた会話は、

桃「パパ、ママと再婚しないの？ ママ今フリーだよ」

百合「ちよつと桃、何言ってるの！」

涼介「ママ、今フリーなの？ おまけに桃がついてくるなら、パパ、狙っちゃおうかな

あゝ？」

百合「ははは」

聡子の横を通り過ぎていく3人。

聡子、居ても立っても居られない様子で、怒りと嫉妬に震えている。

聡子N「こんなに悩んで悩んで、こんなに苦しい思いしてるのは私だけなんだ」

スマホで涼介の番号を押そうとするが思いとどまる。

あみ、梨奈、他の友達、いろんな人に電話をかけようとするも思いとどまり、最後に選んだのは、梨奈が言っていた「だれでも電話」だった。

聡子は「だれでも電話」どこかの誰かと電話する」のボタンを押す。呼び出し音が鳴っている。ガチャッと出たのは若い男の声。

男の声「もしもし？」

聡子「もしもし？」

男の声「今どこ？ なにしてる？」

聡子「外で家に帰るところ」

男の声「これから会える？」

聡子「これから？」

男の声「セックスしない？」

聡子、慌ててアプリを即切りする。

○聡子の実家（夜）

聡子の目の前には、母親の夏見加代

（70）と父親の夏見進之助（72）

が座っている。

加代「どうしたの？ こんな時間に。急に」

聡子「ちよつと話したいことがあって」

加代「もしかして結婚とか？」

聡子「じゃなくて、妊娠した」

加代「え？ 妊娠？ 嘘？ ほんと？ よか

ったじゃない、おめでとう。お母さん付き

合ってる人がいるなんて聞いてなかったわ」

聡子「付き合ってる人はいない」

加代「え？ まさか想像妊娠？」

聡子「相手は結婚できない人。かといって不倫でもない。それだけは言える」

加代「どういうことよ、それ。どうするの

よ？」

聡子「どうしたらいい？」

加代「お父さん、なんか言ってよ」

進之助「そんな望まれない子を産んで幸せになるはずがないだろ？ 子供が苦勞するだけだ」

聡子「・・・」

加代「お母さんは賛成よ。大変なことでもいいあったけど、お母さんにとって子供が産まれたことは人生で一番の幸せだった。もし聡子が生まれてきてよかったと思ってくれたんだったら、そうしてほしいかな」

聡子「お母さん・・・」

進之助「母さんが言ってるのは感情論だ。大切なのは子供を育てられる経済力があるか

どうか。聡子にないだろ？」

加代「あら失礼ね。あるわよね？」

聡子「今のところ・・・最低限は」

進之助「自分の受けた教育と同じ教育を、お前ひとりで子供に受けさせることはできるか？」

聡子「私立は無理かもしれない」

進之助「あれもできない、これもしてあげられない、罪悪感ばかりの子育てになるぞ」

加代「いいじゃない、それで。あれこれできる道が正しい道じゃない。罪悪感を感じない子育てこそ、危険よ。いろいろ悩んで苦しんで、でも最高にハッピーなのが育児なんだから」

聡子「お母さん・・・」

加代「お母さんね、聡子を応援する。産まれてきた時からずっーと応援してるから、最後までとことん応援するよ！」

○聡子の家（夜）

自分の子供の頃の写真を見ている聡子。

父親の声「望まれない子を産んで幸せになるはずがないだろ？」

母親の声「お母さんにとって子供が産まれたことは人生で一番の幸せだった」

聡子「はぁ・・・」

深いため息をつく聡子。

○産婦人科病院（日替わり）

聡子が検診台に寝ている。

横には先生と看護師が立っている。

女医「手術の前に、成長を確認しますね。前の検診から三週間経ってるから、今十週です。はい、失礼しますよ。横のモニター見てください」

聡子「はい」

女医「えーっと、心拍が確認されています。ここ、この小さいのが心臓。小さく動いているの見えますか？」

聡子「え、心臓ですか」

女医「順調でしたが、これから麻酔科医師が
麻酔をして手術に入ります。手術時間は十
分から二十分ほど」

聡子N「赤ちゃんの心臓が動いている」

女医「その後、二、三時間ベッドでお休み
ただいてから、本日中の帰宅となります」

麻酔科医師が入ってくる。

聡子、慌てて飛び起きる。

聡子「すみません！ やっぱりやめます。私、
産みます！」

周囲はあ然とした様子。

○同・受付

聡子が女医と話をしてる。

聡子「この度は本当に申し訳ございませんで
した」

女医「全然大丈夫ですよ。本音をいうと嬉し
いです。なんか迷ってる感じがしたから。
もう母子手帳もらいに行ってくださいね」

聡子「母子手帳……ですか……」

○区役所の受付

恐る恐る行く聡子。

職員「はい。どうされましたか？」

聡子「母子手帳ってこちらでもらえますか？」

職員「はい。この妊娠届出書に記入して提出してください」

聡子、用紙に住所名前など書いている。

「妊娠されて今のお気持ちはいかがですか？」というアンケートの、①うれしい②たのしみ③とまどい④不安⑤心配⑥その他（ ）のすべての項目に丸をつける聡子。

聡子、母子手帳を手に入れる。

聡子、スマホで母子手帳の写真を撮り、涼介に送る。

○涼介の会社

涼介、聡子からのラインを見るなり、慌てて聡子に電話する。

聡子の声「もしもし」

涼介「これ、どういうこと？」

聡子の声「そういうこと」

涼介「産むの？」

聡子の声「産む」

涼介「どうして？」

○路上

聡子、涼介の「どうして？」にカチンときて、周囲を気にせず大声になる。

聡子「どうして？ 理由を説明すれば納得するの？」

涼介の声「気が変わった理由を知りたい」

聡子「再婚するの？」

涼介の声「誰が？」

聡子「涼介が」

涼介の声「しないよ。なにそれ？ 誰がそんなこと言ってたの？」

聡子、スマホを切った後に、
聡子「あなたです」

聡子のスマホの着信音は鳴り続けている。
る。

○あみの家（夜）

あみと橋本が向かい合っている。

テーブルには一枚の紙が置かれている。

あみ「凍結した胚移植、もうこれが最後の一個になっちゃった。次のタイミングで移植するから同意書にサインお願いします」

橋本「わかったよ」

あみ「これが終わったら、また一から、採卵からやりなおし。不妊治療、まだ続ける？」

橋本「それはあみが決めて」

あみ「そうやっていつも人任せ。責任を人に押し付けてる」

橋本「いつも言ってる。僕は子供はいてもいなくてもどっちでもいいんだ。でもあみが欲しいならとことん付き合う」

あみ「その言葉が、いつも私を傷つけてるってわからないの？」

橋本「え？」

あみ「私の意見を優先している優しい旦那ぶ
るのやめてくれない？ そんなの優しさで
もなんでもない。私はあなたの本心が聞け
ないことが一番傷つくのよ」

橋本「・・・」

あみ「体外受精、この最後一個でもう終わり
にしようと思う。もう本当にラストチャン
ス」

橋本「あみがそうしたいなら、そうすればい
い」

あみ「ねえ、今の話聞いてた？」

あみ、悲しそうな顔で橋本を見る。

○梨奈の家（夜）

梨奈、翔の小さい頃の写真を見ている。
2歳までは父親も写っているが、以降
は梨奈と翔と2人の写真が多い。そし
て、たまに知らない男性と3ショット
の写真も。そこに、翔が帰ってくる。

梨奈、慌てて写真を片付ける。

梨奈「おかえりー」

翔「・・・」

梨奈「今日はカレーだよー」

翔「・・・」

カレーを食べる翔を見ている梨奈。

梨奈「翔、お母さんって毒親？」

翔「それネタで言ったんだけど。気にした？」

梨奈「ネタ？ ああネタだったの？ でもま

だ怒ってるでしょ？」

翔「産まなきやよかった発言は普通にトラウ

マだよ。でもこの年になってやっと気づい

たことがある」

梨奈「何？」

翔「女は男によって変わる生き物なんだって

こと」

翔、梨奈が隠した一枚の写真を取り出

し、写真に写る男を指差す。

翔「こいつがいたから、あんなこと言ったん

でしょ？」

梨奈「・・・」

翔「でもあの時、こいつに殴られてる僕を、
母さんが守ってくれたことは忘れないよ」

梨奈、翔から写真を奪い、破る。

翔「あとさ、もうそろそろ恋とかしたほうが
いいんじゃない？」

梨奈「恋？」

翔「再婚活つていうの？ 知らんけど。人生
最後の恋でもしたら？」

梨奈「どうしたの？ 突然」

翔「もう俺は大丈夫だから。俺だけのために
生きないで。ごちそうさま」

翔、自分の部屋に戻っていく。

梨奈「最後の恋？ ラストラブ？」

○聡子の家（夜）

聡子と涼介が話をしている。

聡子「ひとり育てていくから大丈夫」

涼介「そういう問題じゃないんだよ。どうし
てそうなったのか説明してくれ」

聡子「母性ってやつ」

涼介「は？」

聡子「気づいたら、私の中の母性ってやつが
とんでもなく大きくなってた」

涼介「母性？」

聡子「今日、手術しようと思って病院に行っ
たら、赤ちゃんの心臓が動いていた」

涼介「え？」

聡子「この心臓を守らなきゃって、母性が叫
んでいた」

涼介「でもそれにしても、ひとりで決めて、
ひとりで産んで、ひとりで育てるって自分
勝手じゃない？」

聡子「昔は自分勝手なところが好きって言っ
てくれたよね」

涼介「そうだったけ？」

聡子「自分勝手なのはお互い様じゃない？」

涼介は、赤ちゃんがいなくなったら、まるで何事もなかったように自由な生活をして、
会いたい時に元嫁や子供と会って、そっち

のほうがよっぽど自分勝手じゃない？」

涼介「そうかもな」

聡子「私見たの」

涼介「なにを？」

聡子「涼介が家族と歩いているところ。ああ、

この人が私と涼介が別れた後に・・・、い

や別れる前から付き合ってたででしょ？」

涼介「！？」

聡子「知ってたよ」

涼介「そっかそっか」

聡子「どうせ、あの時も私に子供ができてマ

ズいと思っただんでしょ？」

涼介「そんなことないよ」

聡子「墮ろした後、すぐに別れ話してきたよ

ね。仕事頑張るとか言いながら違うこと頑

張ってたんだよね」

涼介「そんな昔のこと、忘れたよ」

聡子「私は今でも覚えてる」

涼介「・・・」

聡子「ずっと好きだったから。別れてからも

ずっとずっと好きだったよ。19歳で涼介を好きになって、そろそろ四半世紀になるよ。結局涼介を越えるような人は後にも先にも現れなかった」

涼介、驚きの顔になる。

涼介「・・・」

聡子「だから、認知も慰謝料も養育費も求めない。子供に会いたくなかったら会わなくていい。最後の自分勝手を許してよ」

涼介「・・・」

涼介、何も言わず聡子の家を出ていく。

涼介の後ろ姿を見てる聡子。

聡子N「涼介を傷つけるだけ傷つけて、ずっと隠していたストーリーカーバリの告白をして、最後の最後まで涼介が言うはずのない言葉を待っている自分が、恥ずかしかった」

○カフェ

聡子と梨奈とあみが話をしている。

聡子「・・・ということがあって」

あみ「18年前の出来事を持ち出して男を詰めていくのって、ボロボロの手榴弾を手渡しするみたいな迫力があるわよね」

梨奈「しかも、四半世紀分の愛の告白でしょ？

よ？ ホラー映画よりも怖い展開」

聡子「でももう気持ちの整理がついたから」

あみ「そう言ってるうちは、まだまだ整理が
ついてない証拠」

聡子「でも、結局、うちの関係ってなんだ
ったのかなって」

あみ「そんなこと考えても結論はでないし、
意味がないよ。今は出産のことだけを考え
なきゃ」

聡子「そうだね」

街路樹の葉が赤黄色に染まっている。

○街の風景

赤黄色に染まっている街路樹の葉（秋）
が次第に枯れ落ち、木には雪が積もっ
いく。（冬）

○ 聡子の家

部屋には、ベビーベッドや赤ちゃんのおもちゃ、服など、赤ちゃん用品が溢れている。

お腹が大きくなった聡子が料理をしている。

○ 街の風景

雪の積もった木（冬）から、次第にピンクの花を咲かす木（春）になり、やがて緑鮮やかな新緑（夏）となる。

○ 病院

ベッドには聡子が横たわっており、周囲には医師や看護師がいる。

不安そうな聡子の顔。

医師「麻酔がきいてきたら始めますね」

聡子「よろしく願いします」

その時、赤ちゃんの泣き声が響き渡る。

涙を流す聡子。

○聡子の家（夜）

机でパソコンを打ちながら通話する聡子。在宅ワークをしている。

机の上には、聡子の両親と赤ちゃんと聡子の4人で撮った写真が飾られている。両親の顔からは嬉しさがこみ上げている。

聡子「そちらの物件は、今大家さんに確認しておりますので、お待ちください」

その時、赤ちゃんが泣き出す。

聡子「はい。すみません。失礼いたします」
電話を切ると、すぐに赤ちゃんに駆け寄り、抱っこする聡子。

聡子「はいはい。よしよし。オムツ替えますかあ？」

聡子N「40も半ばになってからわかったことがある」

○同・キッチン（夜）

鍋を作る聡子。

そこにピンポーンというチャイムが鳴る。

○同・玄関（夜）

玄関のドアが開くと、男が立っている。

男の後ろから、梨奈が登場する。

聡子「わあ！ びっくりした」

梨奈「彼氏連れてきちゃった」

聡子「あ、噂の？ 初めましてー。どうぞど

うぞ」

○同・リビング（夜）

梨奈とその彼氏が部屋に入ると、また

玄関のチャイムがピンポーンと鳴る。

○同・玄関（夜）

玄関のドアが開くと、あみが立っている。そのお腹は、大きく膨らんでいる。

聡子「あらーお腹大つきくなったね。もしかして男の子？」

あみ「それが、まだわかんないんだよね」

○同・リビング（夜）

聡子、梨奈、梨奈の彼氏、あみと鍋を囲んで食べている。

聡子N「ラストチャンスの後には、必ず新しい始まりが待っているということ」

聡子の傍で寝ていた赤ちゃんが泣き始める。

聡子「あ、オムツ取り替えなきゃ」

聡子、オムツの入った棚をあさっていると、中から一枚の紙がヒラヒラと落ちる。聡子、拾いあげると、以前書いた【諦めることリスト】だった。

【諦めることリスト】には、
結婚、出産、出世、徹夜、金髪、
ワンナイトセックス
と書かれている。

聡子は笑いながら、

聡子「赤ちゃん産んでから、徹夜ばっかだっ

ちゅーねん」

聡子、【諦めることリスト】をくしや

くしやに丸めてゴミ箱に捨てる。

笑顔の聡子。